社会的自立に向けた作業学習

~仲間と協同的に取り組む作業学習のやりがいと「自分づくり」~

鳥取大学附属特別支援学校 教諭 髙田 大輔

I 実践に当たって

| 学校について

本校は、鳥取大学に附属する知的障害特別支援学校である。平成 I 8年に国公立知的障害特別支援学校で初めて高等部専攻科が設置され、小学部、中学部、高等部本科、高等部専攻科の 4 学部・科にわたって 6 歳から 2 0 歳までの児童生徒学生が学んでいる。「豊かな心をもち、生活を楽しむ子」を教育目標に掲げ、人格的自立を目指した「自分づくり」に取り組んでいる。将来の生活を豊かで生き生きとよろこびに溢れたものにするために今の生活が充実していることと、児童生徒学生が内発的で主体的に気持ちを循環させながら自己肯定感を膨らませていくことをめざして、児童生徒学生のライフステージを大切にした教育の充実を図っている。

2 中学部の教育

(1) 生徒のライフステージと実態

中学部生徒のライフステージは、青年期前期にあたる。この時期は、心身ともに大きな変化が起こる思春期でもある。社会への興味関心が拡がり、大人への憧れを抱いて、よりよい自分を求めてつくり上げていこうとする。反面、社会の中の自分が見え始めることで、他人と自分を比べ、未熟な自分を否定的に見つめたり、他者からの評価を気にしたりする等、葛藤が生じやすい。この葛藤は、自分で自分をつくりかえていく発達の証であり、「自分づくり」につながる青年期の大切な成長過程の姿でもある。不安な自分を支えるために共感し合える仲間を求め、仲間の存在に支えられながら、自分を確立していく時期である。生徒は、学校生活において、なりたい理想像を思い描いて進んでリーダーシップを発揮したり、仲間同士で声を掛け合って協力して活動を進めようとしたりする姿が見られる。また、「できる - できない」という二分的な評価にとらわれて、前向きに活動に取り組めない姿も見られ、発達に関わるさまざまな内面が推察される。将来の生活に対しては、「好きなことを仕事にしたい」という願いや憧れをもっている生徒と、「まだ何がしたいか分からない」「できれば働きたくない」と思っている生徒がいる。

(2) めざす生徒像

中学部のめざす生徒像を「自分のめあてに向かって、仲間と一緒に意欲的に活動する生徒~見つけよう、拡げよう、仲間とともに~」としている。仲間を求めて関わりが拡がる時期、実際の社会生活に憧れや興味を膨らませ始める時期であることから、学級や学部の仲間と目的を共有しながらさまざまな活動に挑戦して生活経験や人との関わりを拡げていくことと、その中で新たな価値を見つけて仲間や自分のよさに向き合うことを大切にしている。生徒のライフステージらしい憧れや願いを見つめ、自ら伸びようとする内面の支援について、発達的な視点を参考にしながら教育に当たっている。

(3)作業学習について

中学部の作業学習は、陶芸班、手工芸班、農園班の三つの作業班を設けている。各学年の生徒が三つの作業班に分かれて縦割りの学習グループを組み、年間を通して一つの作業班に所属している。作業班を I 年ごとに交代しながら、中学部 3 年間を通して全作業班を経験することになる。教育課程におけるねらいを「生活の営みに係る見方・考え方や職業の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を通して、将来のよりよい生活の実現に向けて工夫する資質や能力を育てる」としている。作業学習は、中学部に入学した生徒が新たに学び始める学習内容である。各作業班で作業内容や学習のプロセスは異なるが、いずれの作業班においても、生徒が仲間との関わりの中で主体的に自分を発揮して課題解決していくことを目指して、作業学習におけるやりがいや喜

び、成就感、自分のよさを味わうことができるように支援することを指導の重点に置いている。高 等部専攻科修了後の社会生活を見据えて、生徒が将来を豊かに生きるための土台づくりとなる学習 内容の工夫を行っている。

Ⅱ 実践内容

| 陶芸班の実践

- (1) 学習内容設定の工夫
- ①「本物を知る」

鳥取県内の手仕事を紹介する県ホームページ等を活用して、窯元を営む 陶芸家とそこで作られる皿の特徴を知る機会を設けた。生徒はさまざまな 色や形でデザインされた皿を見て、窯元ごとに特色があることが分かり、 「これいい」や「これ欲しい」等、興味をもって見比べる姿が見られた。 また、オンラインによる窯元見学を行い、陶芸家の方のお話を聞いて皿作 りに対する思いに触れたり、実際に作るところを見せてもらったりする機 会を設けた。陶芸家の方から生徒が作った製品に対するコメントをいただ くと、生徒からは「釉薬のことが分かってよかった」「ぼくもきれいに作 りたい」等の感想が聞かれた。

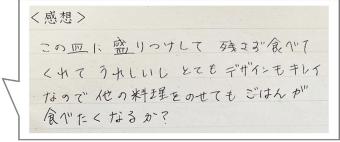


資料を通して、 窯元を知る

②「自分で使ってみる」

製作した皿の中から使ってみたいものを選んで、家庭に持ち帰る機会を設けた。盛り付けたメニューの写真を添えて保護者に感想を書いてもらったり、実際に使ってみた生徒の感想を伝え合ったりした。保護者からは、「色がきれいで梨がおいしそうに見えた」「底がガタガタしていた」「仕切りを設けたプレートの方が使用頻度が高い」等、製品の仕上がりや使い方のニーズに関する感想や意見をいただき、生徒はそれらをもとに次の製品作りに向けて計画を立てる参考にすることができた。





保護者による感想シート

③「自分らしく工夫する」

皿作りに対する挑戦意欲を引き出すために、生徒一人一人が陶芸家として活動する学習の機会を設けた。陶芸家としての自分の名前を自由に決めてよいことにして、皿の裏側には自分がデザインした印を押すことにした。一人一人がオリジナルブランドを立ち上げるイメージで取り組み、皿の売りやよさを考えることで、「こりゃええわ」等とつぶやきながら、自分のアイディアをもって手がけた製品が買い手に渡る期待感に心を躍らせながら取り組む様子が見られた。





陶芸家○○による製品計画の様子とワークシート

④「仲間と見合う」

製品発表会を行い、自分が作った製品のよさや使い方を生徒同士が紹介し合った。仲間が作った 製品を見て、お互いに意見交換をする機会を設けたが、その際には「いいねコメント」と「応援コ メント」の2種類のカードを用意した。その製品のよさを「いいねコメント」、がんばったらもっ とよくなりそうなポイントを「応援コメント」として、仲間同士が互いを支え合って陶芸班全体が よりよくなっていくことを大切にするよう確認した上で取り組んだ。特に生徒の応援コメントで は、「ふちがちょっとザラザラしているから、なめらかにした方がいいよ」「なめしがわでしたほ うがいいと思うよ」「このちょうしで、がんば!!」等、仲間のことを思って書き方を工夫したコ メントが多く見られた。コメントを交換して、「もらってうれしかったです」「ふちをきれいにな めす」等の前向き且つ次の製作に繋がる具体的な感想があった。仲間の製品に対する思い入れに触 れたことで、「(自分も)色のくみあわせをきれいにつけたいです」と感想を書く生徒もおり、仲 間からのコメントにはなかった内容についても、進んでよりよくしていこうと意欲的に向き合う姿 が見られた。







製品発表会の様子とコメントカード

仲間より いいねコメント 応援コメント きこのちょうして、がとはい 織、ふちかちょうとザブサ 7るから、たかした方が川! 織なめしかわていたほ がいいと思うよ 總面与各人中的 tho TE wife

Ⅲ 成果と課題

生徒は、自分が手がけた皿に対して、「自分が欲しい」「絶対にね、お母さんに買ってもらう」等の 思い入れをもつ感想が多く聞かれた。買い手に渡ることを意識して、できる限り丁寧に製品作りに取 り組んでいても、よく売れる皿と売れ残ることが多い皿が生じる。そのちがいについて、「やっぱり 裏が少しザラザラしとるから」「花の形は使うところがあんまりないんじゃない」等と言って、理由 を想像しながら次の製品作りに生かそうとする姿が見られた。製品を販売するやりがい、考えや思い をもって仕上げる喜び、売れた時の成就感と、生徒が期待感をもって取り組むことが大切であると再 確認した。

今回の取組では、「本物を知る」「自分で使ってみる」「自分らしく工夫する」「仲間と見合う」とい ういずれの活動においても、他者の考えや思いに触れ、それをもとに生徒が自ら目標を見つけること に取り組むことができた。「仲間のためになるコメントを書きたい」「買い手のために丁寧に仕上げた い」等の気持ちをもち、誰かのために役立とうとするよりよい自分を感じることで、さらに自分を高 めていきたいという前向きな内面を育むことができた。このような学びが成立する前提として、仲間 関係の構築が重要である。仲間同士が互いの考えや思いを尊重し合える環境作りに当たっては、日頃 から教師が生徒を評価する際に「できたか - できていないか」という見方以外にも、「どのような考 えや思いで行動しようとしたのか」「どうしたかったのか」という内面を受けとめ、その行動に至っ たプロセスを認めながら助言していくことが必要だと考える。教師が生徒と向き合う姿勢は、生徒が 人と関わる上での大切な手本になる。体系的に整備された教育課程に加えて、人や場の雰囲気や在り 方を構成する「隠れたカリキュラム」に配慮することが、仲間関係の中で安心して自分を発揮する成 長に繋がるものと考える。

本年度の本校における教育課程研究の中で、中学部・作業学習、高等部本科・作業学習、高等部専 攻科・労働の教育課程の系統性について、整理と見直しに取り組んでいる。それぞれの学部・科の生 徒学生のライフステージと、高等部専攻科修了後を見据えた学部・科の段階的なねらいのちがいを踏 まえて、各学部・科の実践がどのように繋がっているかを整理しているところである。この研究の取 組の中で、改めて中学部の各作業班における学習内容の改善を図っていきたい。